

能海寛『世界に於ける仏教徒』に見るチベット観

タイトル	能海寛『世界に於ける仏教徒』に見るチベット観
著者名	高本康子
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第9号
ページ	58－73
発行年	2003.12.15
E-mail	sekihou@hazaway.com (能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）淨蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

能海寛『世界に於ける仏教徒』に見るチベット観

能海寛研究会会員 高本 康子
(東北大学国際文化研究科博士課程後期)

1. はじめに

浄土真宗大谷派（以下「東本願寺」）は日本仏教各派の中で最も早く大陸への行動を開始したと言える。東本願寺内でも学識の高さで知られた学僧小栗栖香頂^{*1}が仏教視察を決意して自ら中国へ渡ったのが1876（明治6）年であり、これは日本陸軍による中国情報の収集活動開始とほぼ時期を同じくする。

東本願寺の大陸での活動については、「支那布教の旨意に関する御直諭」の発表（1879（明治9）年）、最初の拠点である上海別院の設立（同年）、布教のための参考書である『真宗要旨』、『喇嘛教沿革』等の出版（1880（明治10）年）等が立て続けに実行に移された時期を第一次中国開教、その後中断を経て1898（明治31）年に再び「清国開教の御親示」が出され、中国各地に教場や学校が次々に開かれていった時期を第二次中国開教とすることができる。これら第一次・第二次通じて、東本願寺の宗政の頂点に立つ寺務総長（寺務所長）を4度務めた石川舜台^{*2}が、後に「世界的布教計画」^{*3}とも評されることになる大規模な構想に基づいて、大陸での教線拡張を図る事業を次々に実現していった。チベット仏教との積極的な接触もその中に含まれる。

第一次開教時には、中国国内で大きな影響力をもつチベット仏教との連携を目指して、在中国のチベット仏教の高僧たちに積極的に働きかけている。また、この時期布教の参考書として出された小栗栖の『喇嘛教沿革』は、明治期に入って初めてのまとまったチベット仏教の概説書でもあった。第二次開教時には実際に入蔵を希望する若者たちを派遣、チベット仏教の最高権力者ダライラマとの直接交渉を試みるに至る。本稿で取り上げる『世界に於ける仏教徒』の著者能海寛は、この時期実際にチベットへ派遣された中の一人であった。

本稿では能海寛の『世界に於ける仏教徒』（1893（明治26）年）を中心に上げ、石川・小栗栖に続く若い世代の仏教者たちの視野に、チベットがどのように捉えられていたのかを考察する。接触する目標があくまで中国国内のチベット仏教に限られていた石川・小栗栖から、更に進んで実際にチベット本土を目指して行動を起こそうとした能海ら若い世代が、どのようなチベット像を作り上げていったのか

という検討を通じて、明治前半期の仏教者の視野に捉えられたチベットがいかなるものであったのか、その一端を明らかにしたいと思う。

2. 能海寛と『世界に於ける仏教徒』

能海寛は1868年（明治元年）5月18日、島根県那賀郡金城町の東本願寺派の浄蓮寺に生まれた。西本願寺の普通教校、慶應義塾、哲学館で学んだのち、東本願寺のサンスクリット学者南條文雄のもとでチベット入りの準備を進め、東本願寺の第二次中国開教事業において、1898（明治31）年、中国各地に配置される12名の留学生の一人として送り出された。寺本婉雅⁴と合流して共にチベットを目指し、1899（明治32）年パタンに到達、チベット域内に入った初めての日本人となったが、中国官憲に阻まれ、二人はそこから引き返す。その後寺本はいったん帰国したが、能海は中国国内にとどまり、中国側から再度、入蔵を試みて失敗、1901年4月18日付南條宛の最後の書簡を残し、雲南経由の道をとった途上で消息を絶った。

彼と石川舜台、小栗栖香頂との直接のつながりははっきりしないが、石川が指揮する第二次中国開教事業によって能海のチベット派遣が実現したということと、能海が上京し慶應義塾、哲学館、そして南條文雄の膝下で学問に励んでいた時期が、小栗栖香頂が東京在勤であった時期と重なっていること、能海の恩師南條が小栗栖と非常に親しい間柄であった⁵こと等は現在のところ確実であると言える。

更に、能海の地元島根県金城町で、能海の基礎資料の整理と研究を続けている隅田正三によって、能海の生家に、チベット派遣についての石川の書簡が残されていることが明らかとなっており⁶、また『仏教』、『教学論集』、『日本之教学』など石川や小栗栖が寄稿していた雑誌が遺品の中にあつて、能海が石川、小栗栖の著作に触れる機会をもっていたと考えられることもやはり同氏によって指摘されている⁷。加えて『世界に於ける仏教徒』には、『喇嘛教沿革』ではないが、小栗栖の著述に対する言及もあり⁸、これは彼が小栗栖の著作を読んでいたと推測できる根拠のひとつであると思われる。

『世界に於ける仏教徒』は、井上円了が書籍の廉価販売を期して設立した哲学書院から1893（明治26）年に出版されたものである。ほぼ自費出版に近かったことが、『山陰中央新報』の記者で能海について連載記事を書いた万代剛によって指摘されており⁹、一般にはほとんど出回らなかった著作であると見ていい。したがって出版当時、広く人々に影響を与えたとは思われない。

しかしこの本に注目すべき理由は、仏教の世界布教と仏教改革という主旨のもとに、「西藏国探検の必要」と題してチベット探検の必要性が論じられていて、当時の仏教者がどのような認識をもってチベットへ接近しようとしていたのか、それを

具体的にうかがいうることにある。更に、入蔵を志した日本人のうち、チベットへ向かう前に、このような形式で自身の見解をまとめている人物がないことも理由の一つに挙げられる。従って『世界に於ける仏教徒』は、入蔵者が自身の見聞としてチベット現地で得た情報ではなく、当時日本国内に存在したチベット情報がどのようなものであったのか、そしてそれらの情報からどのようなチベット像が編み出されていたのかを見るにも貴重な資料であると言える。

3. 反省会とチベット

『世界に於ける仏教徒』を検討する際、筆者が注目したいと思うのは、能海が参加していた反省会の論調である。反省会は浄土真宗本願寺派（西本願寺）設立の高等教育機関普通教校の学生たちが結成した団体で、西本願寺門下の学生たち中心に運営されていたが、当時改革を叫ぶ先鋭的な若い仏教者たちの宗派を越えた拠点ともなっていた。彼らは「海外宣教」と「禁酒進徳」を「二大事業」として掲げ^{*10}、島地黙雷や南條文雄など仏教界の重鎮とも目される人々の支援を受けて、活発に活動していた。能海は『世界に於ける仏教徒』出版に4か月ほど先だって、『世界に於ける仏教徒』第九章「西藏国探検の必要」に相当する部分を、明治26年7月、反省会の機関誌『反省雑誌』と、哲学書院から発行されている評論雑誌『天則』に発表している。

反省会員の間では、早い時期からチベット行きの必要性が認識されており、インドに留学しているメンバーが行動を起こしていた。例えば会員でインド留学中の善連法彦、小泉了諦の二人が、日本へ帰国するにあたってネパール、カシミール、チベット経由の道を取る予定であることが『反省会雑誌』1890（明治23）年11月号「雑報」欄34頁に報じられている。同じくインドに留学している川上貞信についても同様のスケジュールが『反省会雑誌』1891（明治24）年4月号「雑報」欄31頁に伝えられている。

反省会のチベットへの視線を具体的に見ることができるのは、川上貞信がチベット入りを目指して出発したことを報じる1893（明治26）年3月27日発行の『反省雑誌』社説「仏門の福島中佐」である。川上のチベットへの出発が社説のトピックとして取り上げられたことは、それまでのチベット挑戦の記事が全て会員の動向を報じる「彙報」の中の一つ、つまりメモ的な記事であったこととは一線を画すものであった。記事の取り扱いに見られるこの変化は、反省会が活動の二大柱の一つとして「海外宣教」を掲げていることから分かるように、反省会自体に海外への旺盛な関心が元来あったところへ、1893（明治26）年に起こった一種の探検ブーム、郡司成忠大尉の千島探検と、福島安正中佐のシベリア横断などの話題が世論の関心を集めたさ

なかにあったという状況が重なったことを背景としている。反省会がこの時期「探検」の対象として注目したのはチベットだけではなく、例えば郡司大尉の千島探検への同行を読者に呼びかけ（3月号）、次の号では里見法爾が千島行を決意したことを報じている（4月号）。タイトルにおいて、川上のチベット行きを福島 of 壮挙に擬していることから、反省会がこのブームに敏感に反応していることが見て取れよう。

川上は、やはりインドに留学していた反省会員の一人で先にボンベイで客死した東温謙の遺志を継ぎ、チベット入りを目指した。この社説は、「実に現時世界に於ての全盛を極むるもの」（1頁）であるチベット仏教が、現時点においてその教義や経典、歴史の一切が不明であることを指摘し、川上のチベット入りが成功すればこれらの謎の解明に資すること「其功益、其名誉、豈独り日本仏教徒のみに止まらんや」（本文傍点）と予想している。そして「西藏探嶮」（ママ、2頁）を、現在の仏教徒がなすべき海外事業のうち、「特に中央亞細亞の仏教を探究するは日本仏教徒の任務なり」（2頁）と位置づけ、川上の挑戦を、福島中佐のシベリア横断や郡司大尉の千島探検にも劣らない壮挙として讃え、この探検がもたらすであろう成果のもつ世界的な意義を喧伝するものとなっている。チベット事情については詳しくは記述されないが、ここに使用されている表現に当時のチベット・イメージを端的にうかがうことができると思われる。

例えば、チベット自体は「世界最高の高原」（2頁）と表現されている。そこへたどり着くまでのルートは、「比摩刺耶の絶嶮を越え」（1頁）、「天漠々地茫々、ヒマラヤの北遙かにブラマフートラの河源を横きり」（1頁）などと記述される。そそり立つ高峰がチベットへの行く手を遮っている、というイメージは、第1節で検討した小栗栖香頂『喇嘛教沿革』と共通するものである。しかし「ブラマフートラの河源」という表現の出現には、当時イギリスによって盛んに試みられていたヒマラヤ周辺の河源探索調査の影響が考えられる^{*11}。

チベットの首都ラサは、「実に現時世界に於ての全盛を極むる」（1頁）チベット仏教の「金光粲然たる仏陀の殿堂」（2頁）が立ち並ぶ「中央亞細亞靈界の宝府」（1頁）と表現されている。これは、小栗栖香頂が『喇嘛教沿革』で描いた「僧舎万余間ニシテ金玉銀銅ノ仏像無数ナリ歴代ノ宝器充・シテ日ニ耀ク」（17頁、復刻版42頁）ラサの姿と同じイメージが踏襲されていることを示している。同時に「靈界の宝府」という表現には、当時ヨーロッパにあった、ラサを、ローマにも匹敵する仏教世界の中心である、とするイメージの影響を見て取れる^{*12}。

このチベット仏教については、「冒険排難の業を喜び、遠搜深尋の気に富める彼歐洲の銀色人種すら、猶之を審かにせず、世界各国人の悉く知らんことを欲するところ」（1頁）、つまり世界的にみても未解明の部分が多々あると記述されている。

しかし未知が強調される一方で、「峻厳なるラマ教の規律」、「渋艱なる西藏の文字」（2頁）という表現も見受けられる。つまり未解明である、謎であるというイメージがあると同時に、戒律や言語に「峻厳」、「渋艱」といったイメージが持たれていたことが示されているのである。これは小栗栖の『喇嘛教沿革』には見受けられなかったものである。小栗栖はむしろ、戒律については、規律が弛緩して僧侶の風儀が悪化しているとしていた。これも小栗栖が『喇嘛教沿革』を執筆した明治初期以降、チベットについて新たな情報が入ってきていたことを示すものである。

更に注目すべきなのは、「其目的を中絶するが如き失行有んか、世人は唯奇を衒ふの一俗僧として川上貞信なるものを遇せん」（2頁、下線部本文傍点）という記述があることである。この表現は当時の日本において、単にチベットへ行くというだけの行動は、「奇を衒ふ」ものであるというイメージがあったことを示唆するものである。川上の入蔵に、世界的な意義を持つ仏教研究のため、という意義づけが施され、それが強調されていることに、そのイメージの根強さがうかがわれる。

以上見てきた『反省会雑誌』社説「仏門の福島中佐」は、チベットもしくは入蔵に関する反省会の見解を簡潔にまとめたものであると言えるのであるが、更に詳細にこれらについて論じたものが、同年に出版された能海寛『世界に於ける仏教徒』である。次節ではこの著作を検討し、以上に指摘した石川・小栗栖時代からの変化について詳しく考察したいと思う。

4. 「探検」とチベット

『世界に於ける仏教徒』では、入蔵を「西藏探検」と意味づけていることと、チベット事情の記述のされ方に、すでに検討した「仏門の福島中佐」との共通点が見て取れる。但し『世界に於ける仏教徒』には、「仏門の福島中佐」より更に詳細にチベットが論じられているので、反省会、ひいては当時の若い仏教者たちの仏教改革運動におけるそれまでの様々な議論がチベットに集約していく過程を、より具体的に見ていくことができると思われる。

入蔵を探検と意義付けすることについては、能海はまず海外布教の必要性という点から論を始めている。彼は、仏教国同士の交流を深め、それによって釈迦の教えのもとに仏教徒が一丸となって「万国伝道」（57頁）に邁進するべきであるとする。そのためには現在のように宗派毎に異なる解釈がされている仏典ではなく、釈迦の肉声により近い統一された仏典が備えられなくてはならない。その仏典を入手するために、サンスクリット語に最も近い翻訳仏典が大量に残されているチベットにいかなければならない、というのが『世界に於ける仏教徒』の主張である。

この部分に関して、先行する石川舜台や小栗栖香頂の記述と共通するのは、まず

仏教国の連帯を重視している点である。更にキリスト教に対峙する視点から仏教を論じていく点も石川、小栗栖と共通する。ただしキリスト教を「哲学ニ反ス」、「理学トモ衝突」する、即ち一貫した哲学を持たず科学的にも立証できない、「開明人」の宗教としては「極メテ偏頗ナル極メテ浅近ナルモノ」とであると論じ、現在ヨーロッパにおいて見捨てられつつあるとして、これを仏教布教の一大好機と結論する点は、石川、小栗栖が当時の日本の状況に対する危機感から、あたかも攻撃を最大の防禦になぞらえるようにヨーロッパへの布教を構想したのと大いに異なるところである。欧米でのキリスト教の頹勢は『反省会雑誌』誌上で繰り返し報道されており^{*13}、それと表裏をなすように仏教の著しい教勢拡大が伝えられている^{*14}。『世界に於ける仏教徒』の記述はこれらをふまえたものであると思われる。

一方、石川・小栗栖と著しい相違点が見られるのは、「布教」ではなく「探検」という視点からチベットが語られることである。これはこの著作が書かれた当時の状況も影響していると思われる。「探検ノ言ハ今日社会ノ一大風潮物ナルカ」（54頁）とこの章の冒頭に能海が書いているように、当時、特に1893（明治26）年の日本が一種の探検ブームのさなかにあったことはすでに述べた。「探検」という言葉は当時誰しもが眼にし耳にしていた流行語でもあったのである。能海はこの「探検」をキーワードに、「仏門の福島中佐」で「日本仏教徒の義務」と意義付けられたチベット探検について、更に詳細に説明している。

能海は「探検」を二分して、一つは「伝道開教」のために現地の状況を調査すること、もう一つをサンスクリットにより近い仏典を入手するための「仏教国ノ探検」とし、現在仏教徒に要求されている最も優先されるべき急務はまさしく後者であると述べる。この仏典入手の必要性という視点は、石川の記述にも小栗栖の『喇嘛教沿革』にもなかったものである。すでに『反省会雑誌』では、サンスクリット、パーリ、チベット諸語の仏典入手が現在最大の「必用の急務」であることが指摘されていた（明治23年）^{*15}。これはヨーロッパでの、サンスクリット語などの原典を重視する仏教研究の動きに影響されたものであり、日本でも日清戦争前後から顕在化してくる傾向であった。事実1902（明治35）年以降、西本願寺の大谷光瑞によって中央アジア地域を中心に大々的に展開される大谷探検隊は、仏典入手をその目的の一つに掲げている^{*16}。『世界に於ける仏教徒』の以上のような記述は、ヨーロッパに留学して直接彼地の最新の研究に触れた経験をもつ南條文雄などの影響を受けて、仏典入手の重要性についての認識が、日清戦争前後の本格的な抬頭を前にいわば先駆的に、反省会をはじめとする若い仏教者たちの間にすでに存在したことを示している。

仏典入手に関する以上のような認識を基点として、『世界に於ける仏教徒』においては、ネパールやカシミール、中国内地やビルマ、タイなど探検を行うべき仏教

国がいくつか挙げられている。そしてその中でも、チベット仏教が「印度ヨリシテ直伝セル」（60頁）ものであること、そして現在のチベットが、ロシア、イギリス、フランス、清の勢力が競り合っている焦点の位置にあり、一度戦乱が起こればチベット仏教が壊滅的な打撃を受ける危険性があることなどから、チベットこそ最優先で探検されるべき地域であるとされている。小栗栖や石川の記述において、チベット仏教には注目されているが、チベットという地域そのものは視界の中心に捉えられていなかったのとは対照的に、以上に述べた「仏教国ノ探検」という文脈によって、チベットが、中国、インド、ネパール、カシミール、ビルマ、タイなどの諸国をおさえて探検対象地域におけるアプローチ優先順第一位に浮上しているのである。

また能海は、探検の内容について、宗教的関心からだけではなく、「人類学歴史学社会学ノ好材料」の入手も見込んでの調査が行われるべきであるとしている。これには「仏門の福島中佐」に述べられた、入蔵を「奇を衒ふ」ものとするというイメージの存在を裏付けるものである。川上入蔵に、世界的にも重要な成果が見込まれる仏教研究のため、という意義づけが施されたのと同様に、ここで宗教を越えた更に拡大された枠で入蔵の有意義が語られているのは、この「奇を衒ふ」イメージを避ける意味もあったと思われる。そしてその枠に「人類学歴史学社会学」が当てはめられていることには、明治20年代に頻繁に行われた欧米人による中央アジア探検の影響が考えられる。当時はこれらの探検の成果が、考古学的・歴史的・人類学的に華々しく喧伝されていた時期でもあった。「人類学歴史学社会学」的というように、仏教者による探検に、仏教以外の何らかの学術に貢献する成果を得ることを課すというこの特徴は、日本においては以後、大谷探検隊によってより強く受け継がれていく。以上「探検」という概念によって明治20年代には、石川・小栗栖が活動した明治初年から10年代にかけての時期と比べて、大陸をみはるかす仏教徒の視界において、チベットの位置づけに確実な変化があったことは明らかである。

5. 「最闇ナル国」チベット

では『世界に於ける仏教徒』に記述された具体的なチベット情報について検討していきたい。「仏門の福島中佐」では、チベット仏教について、「ラマ宗長」の支配下、仏教としては世界でもまれにみる全盛の状況にあり、寺院や僧侶の数の多さは他の仏教国の追隨を許さないものであるにもかかわらず、その教義、歴史、経典一切が不明である「中央亞細亞靈界の宝府」であることが言われていることはすでに述べた。能海の『世界に於ける仏教徒』のチベットについての説明部分は、この内容を踏襲し更に精細に記述するものとなっている。

ここで注目すべきなのは、小栗栖香頂『喇嘛教沿革』に紹介されたチベット事情

との相違点である。チベット事情を述べるにあたって、小栗栖が漢文史料をそのまま使用したのに対して、能海は、オランダへの留学経験を持ち、学制発布にも学制起草掛として深くかかわった内田正雄が、欧文の地理書から編集した『輿地誌略』の記述を使用している。『輿地誌略』は当時中等学校の教科書にも使用され、一般にも広く読まれた地理書であり、能海の蔵書のうちにその書名が見える^{*17}。また能海は、小栗栖が『喇嘛教沿革』であれほどチベット仏教の密教的特徴を繰り返し強調したにもかかわらず、チベット仏教の教義の第一の特色に「密教」を挙げていない。能海においては、顕教か密教かではなく、まず「大乘仏教」（59頁）であることが言われる。

更にチベットを「閉鎖国」、「世界中今日最闇ナル国」、チベット人を「隠者民」等とする表現、つまり閉鎖されて外部のものは一切立ち入れない国などという意味合いの表現が出現していることも変化の一つである。これは「仏門の福島中佐」の、「冒険排難の業を喜び、遠捜深尋の氣に富める彼歐洲の銀色人種すら、猶之を審かにせず、世界各国人の悉く知らんことを欲するところ」（1頁）と軌を同じくする表現であり、漢文史料をもとに書かれた『喇嘛教沿革』にも、また『輿地誌略』にも見受けられないものである。

以上の変化は、明治10年代の石川・小栗栖以降、明治26年の『世界に於ける仏教徒』に至るまでに新しく入ってきたチベット情報の影響を示唆している。明治10年代から20年代にかけて、欧文文献のチベット情報の影響を、仏教者たちが受けていたことは、例えば1890（明治23）年7月から10月にかけて真言宗系の雑誌『伝燈』に連載された後樂園主人「西藏仏教の起源」という記事^{*18}にもうかがえる。第一にここには、「サミュエルソクラヂンツウエート氏」（第七号、19頁）などという欧米人の研究者の名とおぼしき人名とその説が引用されている。第二に、チベット仏教ゲルク派の開祖であるツォンカパについて、「ツォンカーブハー」（第七号、14頁）などと、それまで漢文史料にあった「宗喀巴」などの漢字表記ではなく、傍線を付したカタカナ表記が使用されている。第三に、「欧州人、斯国を探験せんと欲し、近來種々の手段を廻らし、屢々之をなせども、未だ充分其望を達せざるなり、是れ他なし、西藏は古昔より外国人の來遊を拒絶し常に別世界をなすによるなり」などという記述があり、ここに能海の言うところの「閉鎖国」と軌を一にするイメージの出現が見られる。以上3点はいずれも、この記事が漢文文献ではなく、欧文文献を参考資料にして書かれたものではないかと推測できる根拠となるものである。

能海の周辺、例えば反省会の機関誌『反省会雑誌』にも、海外から送られてくる新聞・雑誌の他に、欧米の仏教に関する文献が頻繁に紹介されている。そのほとんどは英文のものであった。この当時チベット関係の英文文献としては、ターナーの *An account of an embassy to the court of the Teshoo Lama in Tibet*（1800（寛政12）年）、

マーカムの *Narratives of the mission of George Bogle to Tibet, and of the journey of Thomas Manning to Lhasa* (1879 (明治12) 年)、ロックヒルの *The land of the lamas* (1891 (明治24) 年) など、イギリス政府派遣の外交官や軍人、情報収集員などによる旅行報告が出版されていたが、これに加え、当時反省会と頻繁な交流を持っていた神智学協会関係の文献^{*19}、更に盛んに出版され始めていた仏教に関する書籍の影響を考えなければならないだろう。『反省会雑誌』誌上には、神智学者シネットの *Esoteric Buddhism* (1883 (明治16) 年) をはじめ、東洋学者リース・ダビッドの *Buddhism* (1877 (明治10) 年)、詩人エドウィン・アーノルドの *The light of Asia* (1879 (明治12) 年) 等の書名が頻繁に挙げられ、その著者たちの動向も逐一伝えられている。これらの文献は『反省会雑誌』誌上に繰り返し引用されたほか、一部については翻訳作業も進められていた^{*20}。能海個人での欧文文献入手は考えにくくとも、少なくともこれらの文献、新聞や雑誌には反省会で接触することができたと思われる。更に普通教校や慶応義塾、哲学館など彼が所属した学校や、井上円了、南條文雄などの教師たちのもとで彼が欧文文献に触れていた可能性があることを指摘しておかなければならないだろう。

これらの文献にはチベットが気候の寒い高地にあって、仏教信仰の中心地であること、そしてその土地の非常な高度と住民の敵意によって、外部の人間が足を踏み入れることができない未知の土地となっていることが言われる^{*21}。更に、英文学者ピーター・ワシントンがその著『神秘主義への扉』で「チベットという土地がロマンチックものの象徴になり、宗教上の象徴となっていた」^{*22}と指摘している通り、チベットを何か謎めいた秘教の地であるとする捉え方が、特に神智学関係の文献に多く見られる。例えば『反省会雑誌』でも頻繁に取り上げられた文献の一つであるシネットの *Esoteric Buddhism* では、チベットを、普通の人間には到底近づくことのできない隠された秘密の、太古から続く宗教が残されている地、と表現している^{*23}。「仏門の福島中佐」の、チベットを「中央亞細亞靈界の宝府」とする表現にも、このようなチベット観からの影響を考えるべきだと思われる。

能海の『世界に於ける仏教徒』への影響を考える場合にも、彼が非常に意欲的に英語学習に取り組んでいたことから^{*24}、特に英文文献に注目される。能海の蔵書には、チョマ・ド・ケレスの英文のチベット語文法書、イエシエケの蔵英辞書などがあり、さらに遺品として残されている「借用書籍目録」^{*25}には、シュラギントウヴァイトの *Buddhism in Tibet* 他2点が記録されている^{*26}。チョマ・ド・ケレスのチベット語文法書には、チベット仏教の僧院が、近づきがたい山々の中に隔離された、訪れるものがない場所、誰にも妨げられない隠れ家であり、インド亜大陸ではすでに失われた仏典の忠実な翻訳が、完全な状態でここで発見されるだろうと一般に憶測されていることが記述されている^{*27}。『世界に於ける仏教徒』において見られる、

チベットを「閉鎖国」、「世界中今日最闇ナル国」、チベット人を「隠者民」等とする表現は、チョマのこの記述に直接由来するものではないかと推察される。

6. 能海の「チベット」

以上はいわば能海が反省会と共有していた見解であるが、その一方で能海に独自の特徴であると言えるのは、彼がチベットを仏教が社会に生かされているモデルケースと捉え、そこにチベット探検の意義を見ている点である。チベット事情を述べた部分は、「地理書」からの引用とされているが、これはほぼ『輿地誌略』の記述と同一で、ここから一部が抜き出されたものと思われる。長くなるが、『輿地誌略』でのチベット情報紹介部分を以下引用する（下線部は『世界に於ける仏教徒』への引用と考えられる部分）。

西藏 北ハ昆崙ヲ隔テ支那韃靼ニ界シ南西ハ喜馬拉山脈ニ接シテ印度ニ隣シ東ハ支那本部ニ界ス又前藏、後藏ノ兩部ニ區別ス地勢亜細亜中央高原ノ南部ニアリ地球中最モ高度ノ地ニ位スル国ニシテ平原ト雖モ海面ヨリ高キコト一千丈ヨリ一千二百丈ニ至ル（大略富士山頂上ニ等シ）其間高山突兀シ喜馬拉山脈ト平行シテ其高キハ平原ヨリ又一千丈ニ過グ其間湖水多シ○此国亜細亜州中ノ最モ仏教盛ニ僧徒多キ地トス故ニ蒙古ノ人民此国ヲ靈地トシテ隔遠ノ地方ヨリ来リ順拝スル者常ニ多シ国内ノ人口大半僧侶ニシテ寺院堂宇甚多ク其大ナル者三千或ハ四千ノ僧侶群居スル者有リ○僧徒ノ頭領ヲ達賴喇嘛ト号シ法王トシテ国内政務ノ長トス之レヲ弥陀ノ示現セル活仏ナリトシテ人民ノ尊崇スル甚ダ嚴ナリ此法王ニ次デ尚数名ノ貴重ナル高僧アリ其外ニ出ル時ハ市街ノ老弱皆地ニ伏シテ敬礼ヲ施ス若シ之レヲ拝セザル者ハ嚴刑ニ処スルニ至ル又女僧頗ル夥シ○此国百四十年前ヨリ支那ノ管轄ニ歸シ支那ヨリ鎮台ヲ置キ処々ニ戍卒ヲ屯シ之レヲ警衛ス実行スル所ノ政令ハ鎮台ト法王ノ宰相四名ト相議シテ之レヲ施行スト雖モ皆法王ノ許可ヲ經ルヲ要ス且ツ毎歳支那ニ朝シ貢ヲ納ル国内ノ人民都府ニ住スル者文学天文ヲ勤メ礼讓ニ厚ク釈教ヲ講習スルノ生徒多シ○地勢高度ノ地ニ在ルヲ以テ氣候其緯度ニ比スレバ甚寒冷ナリ但東南ノ地ハ米ヲ産ス四隣ノ高山四時雪ヲ戴キ寒風烈シキガ故ニ居民皆羊皮ヲ著ス都府ニ在ル者ハ又毛布ヲ着スルアリ製造品、産物多シ金銀、香木ノ精工品多クハ仏像、仏具等ナリ街坊ハ回部ノ人、印度諸部ノ人民等雜居シ支那及ビ近隣ノ貿易甚ダ盛ナリ市店ノ販売ハ皆婦人ヲ役使シテ之レヲ宰ラシム又此国一般ニ奇異ノ陋習アリ兄弟数人一婦ヲ娶リ共ニ之レヲ妻トスルヲ常トス○内地辺土ノ住民ハ野蛮ニシテ広野ニ転去シ自ラ部落ヲ為テ他ノ管轄ニ歸セザル有リ西部「ラダツク」ノ地方ハ今印度ノ克什米爾政府ニ隸属ス○主府ヲ拉薩ト名ク前藏中ノ一大都ニシテ人口五万法王ノ

宮殿及支那鎮台ノ衙府アリ人家石ヲ以テ造リ市街道路甚清潔ニシテ製作場多ク貿易頗ル繁盛ナリ又壯麗ナル寺院堂塔及ビ廣大ナル弥陀堂アリテ其中無数ノ佛像及ビ金銀宝玉ヲ充滿ス法王ノ宮殿ノ如キハ結構壯觀華美ヲ極メ無数ノ仏堂高塔曼衍シテ内外ニ羅列ス其中皆金銀珠玉ヲ鑲バメ炯々トシテ人目ヲ眩惑ス大凡他ノ各国中此ノ如ク金銀ヲ仏寺僧侶ニ擲チ冥福ヲ祈ル者多キヲ見ズ故ニ法王ノ宮殿ヨリ諸方ノ堂宇ニ至ルマデ其中莫大ノ金銀宝玉ヲ充滿セシム其他ノ府城又法王ノ次グ所ノ至貴至尊ナル高僧ノ宮殿アリ或ハ山林湖水ノ中ニ堂宇アリテ数多ノ女僧ヲ住セシム

(海後宗臣『日本教科書大系 近代編 第十五卷 地理(一)』講談社、1965年、109-110頁)

能海が自著の記述として選択した部分を見ると、彼がチベットを、仏教の生き仏によって統治され、その繁栄を人々が享受して平和に暮らす国、というように描いていたことがわかる。そしてそう述べた上で彼は、「以上ノ記ニ依ルニ我邦仏教徒ノ此国ヲ探検スルノ必要照々トシテ明カナリ」と言い切る。つまり彼は、チベット仏教の繁栄に、日本の仏教徒がチベットを探検する必要性を見ているのである。私は彼が、チベットを、仏教と国家、仏教と社会の関係における一つの理想的なモデルケースとして提示するために、それに適当する部分を編集してこのような記述をしたのではないかと考える。

7. おわりに

そしてこの彼独自のチベット観は、近年になってチベットに関心を持つ人々に強い支持を得ることになる「チベットに傾倒した日本人」、チベット文化に深い理解を示した日本人といった能海像^{*28}と、強い関連をもつものであることを指摘しておきたい。能海のチベット文化への傾倒は、1905年に中国雲南での彼の横死が報道された時から、「能海君といふよりは、寧ろ「西藏」といふ方が通りのよかつた位」^{*29}などと言及されてきてはいるが、現代の日本人の能海像を考えると最も重要だと思われるのは、チベット学者山口瑞鳳の記述である。山口は、能海がチベット・清国境付近打箭爐から『東洋哲学』に寄せた、旅行報告「進蔵通信」の中のチベット文化について述べた部分^{*30}について、「日清戦争にあげた国威を背負うこともなければ、己れのみを元来尊しとして、他の価値を知る前から見下すような濁りが無い。一事を見るだけでも、このように正当な評価ができた」^{*31}と高く評価した。そして能海が生きて日本に戻っていれば、日本のチベット学は大きく変わった可能性があるとし、そうはならなかったことを「惜んであまりある」と表現している。チベット学者として日本人入蔵者の動向を初めてまとめたと言っていい山口のこの記

述の影響は大きく、その後能海について述べる文献のほとんどがこの山口の能海評を引用している。私が注目するのは、以後現代の日本人に強い影響を与えるこの能海像が依拠するチベット観の最初の萌芽を、『世界に於ける仏教徒』に見ることができるということである。『世界に於ける仏教徒』で示された、仏教と社会が理想的な関係を持ちそれによって得られる平和と繁栄を享受している国、というチベット観が、山口が能海の深いチベット理解の根拠として取り上げている「進蔵通信」に見られるチベット観の淵源となっていると私は考える。

以上見てきたように、能海寛の『世界に於ける仏教徒』は、当時海外に目を向けていた若い世代の僧侶たちのチベット観が具体的に反映されている著作であり、彼等の視線を追うためのひとつの貴重なプラットフォームを提供するものであった。この著作には、英文文献の、近づきがたい隔絶された未知の土地、貴重な仏典がそっくり残されている地、というチベット像を若い仏教者たちが受容していたこと、そしてその上で彼らがチベットを、仏典の探索のみではなく言語・文化など広い範囲にわたっての学術的調査の対象として「探検」を行うべき地と捉えていていたことが示されていると言える。

注

*1 1831（天保2）年大分郡戸次妙正寺に生まれた。1873（明治6）年6月、単身中国へ渡り、中国仏教を視察調査し、翌1874（明治7）年7月に帰国した。1876（明治9）年『喇嘛教沿革』、『真宗教旨』の二著作を書き上げたのち上海に渡り、上海別院の設立に尽力したが、翌年病氣療養のため帰国する。1885（明治18）年2月、東京別院在勤を命じられ、以後1899（明治32）年まで、東京での布教活動に没頭した。狭い意味での布教活動以外にも、各方面と広い交際があり、東久世通禧や福沢諭吉をはじめ、柳原前光や副島種臣などとも詩を通じて親交があった。小栗栖は北京語に堪能であり、日清戦争時には、浅草別院に収容された中国人捕虜に北京語で説教するなどの活動をしている。病氣のため1905（明治38）年（74歳）3月18日没した。

*2 1841（天保12）年10月石川県金沢市浄土真宗大谷派永順寺に生まれた。1862（文久2）年、東本願寺の高等教育機関である高倉学寮に入り、学業に励むかたわら、キリスト教研究にも没頭する。1865（慶應元）年金沢へ帰り、1869（明治2）年には地元で慎憲塾を開き、地方青年の教育にあたった。同じ頃石川県での廃仏毀釈反対運動の先頭に立って活動もしている。1871（明治4）年、寺務所議事に任命され本山に入り、翌1872（明治5）年には、光瑩新門主に従って渥美契縁と共に上京、新門主の東京での活動を支えた。更に同年9月13日新門主と共に横浜を発し、欧州視察へ向かった。この新門主洋行は当初本山内でも極秘の行動で、宗派内外に大きな波紋をよ

んだ。1873（明治6）年に帰国、改正掛兼議事翻訳用掛となる。これは当時本山改革の中枢となる要職であったようで、彼は以後、育英と布教という二大事業を宗政刷新の二大柱として推進する。1874（明治7）年には教育課長となり、次々と教育制度改革を進めていった。1876（明治9）年には、本山行政のトップである寺務所長（「寺務総長」という表現をしている資料もあるが、ここでは1937年に出版された高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』（東本願寺上海別院、9頁）に従った。東本願寺の機関誌『配紙』第97号1876（明治9）年8月22日付の記事にも「寺務所長」とあり、南條文雄、笠原研寿など留学生の欧米派遣をはじめ、海外布教事業も次々に実現させていった。しかし1878（明治11）年2月、本山改編に伴って寺務所長を辞し、金沢へ戻って再び慎憲塾で後進の教育に専念する。1887（明治20）年には衆議院選挙に立候補したが落選した。1897（明治30）年本山に改革問題が起こり、石川は寺務所長（『東本願寺上海開教六〇年史』72頁）に復帰した。彼の復帰とともに海外布教事業も動きだし、翌1898（明治31）年、連枝二人が清と台湾へ渡り、第二次支那開教とも言える活動が開始され、チベットへも能海寛の派遣が決定された。しかし1900（明治33）年2月再び寺務総長（『東本願寺上海開教六〇年史』93頁）を辞職する。さらに7月11日仏骨奉迎使一行帰国とほぼ同時に、東本願寺における42万円の使途不明金問題が起こり、石川の責任が問われたが、東本願寺の調査の結果、不正がなかったことが証明された（「臨時会計調査報告書」『宗報』第二十一号付録、1903（明治36）年4月14日付）。『宗報』によると以後、1900（明治33）年10月に三たび寺務総長に復職、1902（明治35）年4月22日付で依願免役務となり、更に1904（明治37）年11月7日付で四度目の寺務総長となり、1905年2月1日付でやはり依願免役務となっている。以後金沢で隠棲し、執筆活動に励んでいたが、1931（昭和6）年12月没した。

*3 高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』東本願寺上海別院、1937年、72頁。

*4 寺本婉雅は1872（明治5）年愛知県海東郡大野村に生まれた。のち京都へ移り、京都府立中学を経て、真宗大谷派高倉学寮（後の大谷大学）に学ぶが途中で退学、チベット探検を志して1898（明治31）年日本を発つ。北京でチベット仏教やチベット語を学びつつ、ダライラマに接触すべく積極的に活動し、1899（明治32）年能海寛とともにチベット領域内パタンに到達した。入蔵失敗後能海とは袂を分かち帰国、翌1900（明治33）年義和団事件に出兵する陸軍に通訳官として従軍し²、北京において清朝の各要路との連絡に奔走する。この時戦乱で荒らされた北京市内の黄寺と資福院でチベット大蔵経を発見、日本に持ち帰った。仏教原典を研究する必要が叫ばれていた当時の日本仏教界において、チベット大蔵経はサンスクリット原本に匹敵する価値をもつ貴重な仏典全集として注目を浴びていたため、このことは初めて日本に本格的なチベット大蔵経がもたらされた快挙として報道され、高く評価され

た。その後も北京で活動し、1901（明治34）年北京のチベット仏教界の重鎮である阿嘉呼図克図一行の来日を実現させた。その後阿嘉を頼って入蔵しようとするが協力が得られず、1905（明治38）年単独で出発、ラサに一ヶ月滞在したのちシッキム経由でインドに出た後帰国した。翌年児玉源太郎や福島安正などの援助を得て再び中国へ渡り、中国滞在中のダライラマに接触、参謀本部や東西両本願寺などとの関係設立のため活動した。1909（明治42）年に帰国以後は大谷大学、京都帝国大学などでチベット語を教えるなど研究生生活に入り、1949（昭和15年）に没した。

*5 南條文雄『懐旧録』平凡社、1979年、194-5頁（大雄閣、1927年）。

*6 明治31年6月24・26日、同年9月13・15日付（隅田正三『求道の師 能海寛』波佐文化協会、1989年、214頁）。

*7 隅田正三「チベット探検の先覚者「能海寛」の生涯と業績」『石峰』第6号、能海寛研究会、1999年、3頁。同氏のご教示によると、遺品として残されている雑誌は以下。『佛教』第128号、佛教学会、明治30年7月15日発行、『教学論集』第15編、無外書房、明治18年3月5日発行、同第17編、明治18年5月5日発行、同第18編、明治18年6月5日発行、『日本之教学』教学書院、明治20年9月30日発行、『法之雨』第110編、明治30年2月20日発行、『国民之友』第42号、民友社、明治22年2月22日発行。

*8 能海寛『世界に於ける仏教徒』哲学書院、1893年、10頁。

*9 「チベット行100年 能海寛の旅に学ぶ」『山陰中央新報』1999年9月2日付。

*10 「海外の事業 内国の事業」『反省会雑誌』1891年9月10日発行、1-2頁。

*11 Bishop, P., *Dreams of power*, London, Athlone Press, Rutherford, N.J, Fairleigh Dickinson University Press, 1993, p.32.

*12 前掲*Dreams of power* の中でビショップは、ロシアの探検家プルジェワルスキーがラサをローマに例えていることに言及している（p.32-33）。その他にも例えば Schlagintweit, E., *Buddhism in Tibet*, Leipzig, F.A.Brockhaus, London, Trubner & Co, 1863. IX頁には、the centre of Buddhist faith in Tibetという表現が見られる。また、1880年代から90年代にかけて、チベットについての英文文献には、ラサをthe holy cityとする表現が頻出する（T.W. Rhys Davids, *Buddhism: being A sketch of the life and teachings of Gautama, the Buddha*, London, Society for promoting Christian Knowledge, 1925, p.248.）。

*13 例えば「米国発兌ノ仏光新聞ヲ読ンテ諸君ニ告ク」『反省会雑誌』第5号、明治21年4月10日発行、9-11頁参照。

*14 例えば「英国仏教の景勢」『反省会雑誌』1891年3月号、「雑報」欄24-25頁参照。

*15 「印度留学の諸兄に望む」『反省会雑誌』1890年7月10日発行、社説欄、1-7頁。

*16 大谷光瑞「序」『西域考古図譜』柏林社書店、1972年（国華社、1915年）。

- *17 岡崎秀紀「『能海寛研究』文献紹介」（2003年1月24日付）7頁、及び同氏のご教示による。
- *18 後樂園主人「西藏仏教の起源」『伝燈』第七、八、十、十一号、1890（明治23）年7-10月。
- *19 例えば『反省会雑誌』第2号の「欧米通信会報」と題する記事の冒頭の、「該会ハ昨年八月ヲ以テ本校教職員ニテ組織セラレタルモノニテ其目的タル専ラ欧米各国ニ在ル神智各協会ト通信ヲ相為シ漸ク海外ニ弘布セントスル仏教ノ情况ヲモ詳悉シ」（「欧米通信会報」『反省会雑誌』第2号、1888（明治21）年1月10日発行、18頁）という記述に始まり、『反省会雑誌』誌上には頻繁に神智学協会会員との書簡のやりとりが報じられている。
- *20 例えば『反省会雑誌』第21号（明治22年7月10日発行）の巻末には、シネットとオルコットの著書の翻訳に有志が着手したことが広告されている。
- *21 Schlagintweit, E., *Buddhism in Tibet*, Leipzig, F.A. Brockhous, London, Trubner, 1863, 145-146頁。Markham, C.R., *Narratives of the mission of George Bogle to Tibet, and of the journey of Thomas Manning to Lhasa*, London, Trubner and Co., 1879, Chapter I -9 頁。Rockhill, W. W., *land of the lamas*, New York, Century Co., 1891, Preface.
- *22 ピーター・ワシントン『神秘主義への扉』中央公論新社、1999年、51頁。
- *23 Alfred Percy Sinnett, *Esoteric Buddhism*, London, Trubner, 1883.（但し筆者は Varanasi, Delhi, Indological Book House, 1972.を参照）。
- *24 詳しくは岡崎秀紀「慶應義塾時代の能海寛について」『石峰』第5号、能海寛研究会、1998年、51-80頁参照。
- *25 岡崎秀紀「『能海寛研究』文献紹介」（未定稿、2003年1月24日作成）8頁。
- *26 「『西藏史文学等』英書」、「アンナルス・ツー・ミュージー・グイメット『西藏蔵経目録（第二巻）』仏書」という記載がある（岡崎秀紀「『能海寛研究』文献紹介」（未定稿、2003年1月24日付、8頁）。
- *27 Koros, A. Csoma, *A grammar of the Tibetan language in English : prepared, under the patronage of the Government and the auspices of the Asiatic Society of Bengal Calcutta*, Baptist Mission Press, 1834. Preface vi 頁。
- *28 能海がチベット文化を高く評価しそれに強くひかれていったということは、近年チベットに関する著述が、能海にふれるとき必ず述べるところである。ジャーナリスト江本嘉伸が中心となって2001年12月15日に開催された「日本人チベット行百年記念フォーラム」の内容をまとめた書、『チベットと日本の百年』（日本人チベット行百年記念フォーラム実行委員会編、新宿書房、2003年）所載「チベットと日本の百年」と題した山口瑞鳳へのインタビュー記録に、小見出しとして「チベットに傾倒した能海寛、冷静だった河口慧海」などという表現が使われていることなど

も、その一例であると言える。

*29 米峰「能海寛君を悼む」『新仏教』第六卷第九号、668頁。

*30 以下はチベットへの一回目のアプローチ失敗後、打箭爐で滞在中の観察である。明治33年2月付。「支那人は多く西藏人を蛮家々々など称し候へとも今彼西藏人の用ゐる真行草隸の書及干殊爾、丹殊爾の翻經を見れば、西藏の文字は一千三百年前印度字より政策せられたるものにて、更に他国の文字を借ることなく自在に文章を書き顯したり、經典は一千乃至一千百年前頃既に自国の語に翻訳せられて少しも他国の言語文字を借りたることなし、我日本の如きは人口は西藏の十倍以上を有し長き歴史を有するにも関らず文字といへば片仮名平仮名のみ、これとても大半は漢字により、漢字にあらずんば完全に文章を形成し完全に意志を表出するを得ず、仏教盛なりと雖日本文の經典としては七千余卷の中、一部半部一卷半卷一品半品もあらざるなり、予は実に日本の学者日本の仏教徒に対して大々の不平を有せざるを得ず、美しくかゝれたる（元来美なる）西藏文字の經典を見て小生は実に羨望に堪へず候、西藏人の書翰が如何に美麗に草書せられてあるかは他日御覽に供すべく候」（能海寛「進蔵通信」『東洋哲学』第7編第5号、1900年、233-4頁）。

*31 山口瑞鳳『チベット』上巻、東京大学出版会、1987年、75頁。

西藏ボン教の「無量寿経」

能海寛は、明治33年に、中国・四川省ダルチェンドで、「般若心経」、「無量寿智経」、「弥勒菩薩誓願経」、「金剛経」の西藏文直訳（梵・蔵・漢・英）などを3月26日までに完成、下記の西藏ボン教の「無量寿経」は、4月25日に和訳を完成している。日本におけるボン教の研究が進んでくると能海寛の翻訳した21ページにわたる記録された文献が目のを見るときがくると思われる。下記写真は、ボン教の一部を掲載。

